



# 李退渓哲学と現代倫理

Toe-Gye Lee's Philosophy and Modern Ethics

金 裕赫\*

## 1. 序 言

現代社会は速度文化の時代であると云われている。我らは従来の交通距離を空間概念に基づいてキロメートルなどの単位をもって表現してきたけれども、いつのまにかそれを時間概念に換ってつかうことになった。これが即ち速度文化の登場を意味しているのである。

此の頃新しく出刊されている外紙によれば、第2次世界大戦がおわった1945年度から世界的な経済文化の中心的な拠点はヨーロッパより太平洋圏に移されながら、いわゆる新産業時代の幕が開かれはじめたといわれている。これは英國の産業革命期よりはじまった産業時代が1945年からそろそろ閉幕の段階にはいっているということを意味するのである。

特に1980年代に際して新たな時代的寵児としていわれている先端科学産業は社会変動を一層加速させている。

新素材による生産体系の大革命と生命工学の発達による自然摂理に対した人間の挑戦は、従来の伝統的な価値観にもたいへんな急変現象を起こさせている。

此のような現象は一言にいえば変化速度の新たな秩序創造だということができる。

\* 韓国ソウル市、檀国大学教授、同中央図書館長

一例をあげれば、今日使われている高速物体の一つとしての飛行機は、どんなに速く飛ぶとしてもソウル市から米国のロサンゼルスまですぐなくとも16~18時間かかる。

しかし、現在開発計画中にある新しい航空機は、日本の東京から米国のロサンゼルスまで2時間30分内に飛べるようになるといわれている。

現在も我らはソウル市、東京都、台北市、香港などの地点を一日生活圏として往復用務地域圏であると信じている。

しかし、遠くない将来においては、アメリカまでも一日生活圏の概念にかわっていくようになってくる。一日生活圏内に異質的な文化が並存することになる時、人間は観念的にいわゆる混和現象に落ち入り易い。

文化的な混和現象内においては、一般的に感覚刺戟がより強く現われる方面で、行動性向も従って現われやすい。

こういうわけで、外来文化ないし異質文化と伝統文化との間に葛藤とか摩擦の現象が起こることになる。

主体的な文化意識に基づいて外来文化を受容することができる時、いわゆる発展論的な視角においての肯定的な余地をもつことができるけれども、もしそうでなければ文化的な従属現象と共に文化的な本質を失なわれる心配も排除できない。

倫理とは、人間生活をよりすばらしく立てゆく

ため必要なのである。故に倫理は、常に人間のため人間によって行われねばならない。即ち、倫理は倫理その自体のため存在するのではない。また、人間も倫理を守るため副次的に存在しているものでもない。ゆえに、倫理は二つの側面をもっている。一つは可変的側面であり、他の一つは不可変的側面である。

倫理はこの両側面をもっているわけで、常にその存在的な意義が明確なものであり、また法制的な意味よりも最も深い内面においての規範力をもつのである。

異質文化の間においての混和現象のなかで、文化主体としての意味をいかに定義してゆくかということは、倫理がもつ不可変的な要素をどれほど明るく体系あるように、また正統性あるように体得しているかを基準として尺度されねばならない。

このような視点に基づいて見る時、李退渓哲学は大変な意味を投げかけてくることは否認できない。

なぜならば、李退渓は韓国人としてもっている自然思想を最も深奥な哲学の体系として定立しているばかりではなく、彼の哲学はすでに東西洋においてもウエイトある説得力をもっているわけである。

哲学論のホームグラウンドだといわれているドイツにおいて多くの学者たちが李退渓研究に対して関心をもっているばかりではなく、米国とか伊太利などの国においても研究機関が開設されているし、台湾とか中国大陸においても各大学に務めておる教授たちが個人的または研究所単位に李退渓研究を進めている。

特に日本においてはその研究活動が相当に広がっており、また研究もレベル高い水準にて行われている。筑波大学の退渓学研究所では博士課程より人材を輩出しておりながら、1985年度には世界の国々より退渓学研究者100余名を招待し超イデオロギ的な学術研究大会も開催したことがある。

今年に至って、韓国においても国際退渓学会を発足させ関係のある国々に支会を開き、また国内市道地域には地方分会を開かせている。

遅れた感じもあるが、東洋思想の根を培い、そこにまた李退渓哲学に基づいて我らの哲学文化的

な基盤をよりはっきりしていけば、今頃の物質文化より圧倒している精神文化を、さらに生き起こすのぞみがあるのでないかと思われる。



檀國大学 退渓記念中央図書館に保存されている李退渓の遺墨の一部

(陶山書院内の読書堂において書いた親筆)

## 2. 李退渓哲学に対する外国よりの認識

李退渓哲学に対し、欧米地域においては僅かに認識段階に入っているけれども、日本をはじめ台湾または中国大陸においては幅広く研究が進められている。

特に日本において退渓学研究者として泰斗と知らされている阿部吉雄は、彼の著書である「李退渓～その行動と思想～」にて次のように書いていく。

第一、退渓は中国宋代の巨儒である朱熹の短点を矯正している。

第二、退渓は韓国において道義哲学の創始者となっている。

第三、退渓は道学東漸史において先駆者となっている。

第四、退渓は韓国において社会的な積弊を矯正してゆくために寄与してきたと論述している。

阿部吉雄の指摘は非常に意味あるところがある。

①理気論争において宋時代の学者達も正しい定説のない中で論難をもっていたことを朱子語類にて読める。

程明道と程伊川、邵康節及び周濂溪らも理気論においてはっきりした叙述を残していない。しか

し、退渓は曰く、理と気は分離できないとして理なしに氣あり得ない（理外無氣）、氣なしに理あり得ない（氣外無理）と言いながら、理はひとつ、けれども気はおのの異に存在するのだと話している（理一氣不齊）。

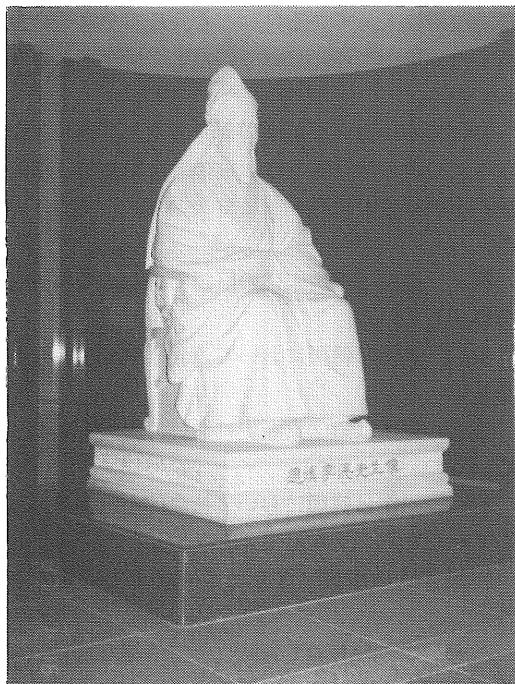
例をあげれば、人間はみんな同じ天性を受けうまれたけれども、人間なりにもっている気質はみんな違うのだと指摘している。これをひとことでいえば「理一元的理氣二元論」である。

宋時代の学者達も、理気問題を中心として一元論か二元論かまたは同元論か異元論かと言いながら各自の主張が同じではなかったのである。

②退渓は学問を理解する基本的な視角がすぐれていたという点において道義哲学の創始者といわれている。

現代においてもそのような傾向があるが、一般的に学問と言うものを官吏登用試験のため必要なのだと認められている場合が多い。それゆえ官吏は自身なりの進退時期に対し正しい判断をすることができないと言っている。

退渓は学問を出世の用具でなく、真理を発見す



檀国大学において新しく建てられた、退渓記念中央図書館の玄関ホール中央部に安置されている李退渓の石像である。図書館入館者はみんなこの石像の前を通ってゆくようになっている

るため精探するのであると言っている。

そのような学問觀を弘通させるため、先代群儒の学問内容を集大成しそれを後世に伝承したことに基づいて、孔孟程朱（孔子、孟子、程子、朱子）の学問をより明らかにしておいたところ、彼を道義哲学の創始者だと云われている。

③退渓を指して、道学東漸史においての先駆者と話されているのは、まず退渓は朱子以後において朱子学の第一人者であり、次は韓日間思想交流史において百濟時代渡来してきた王仁（わに）以来最初の大学者であるからである。

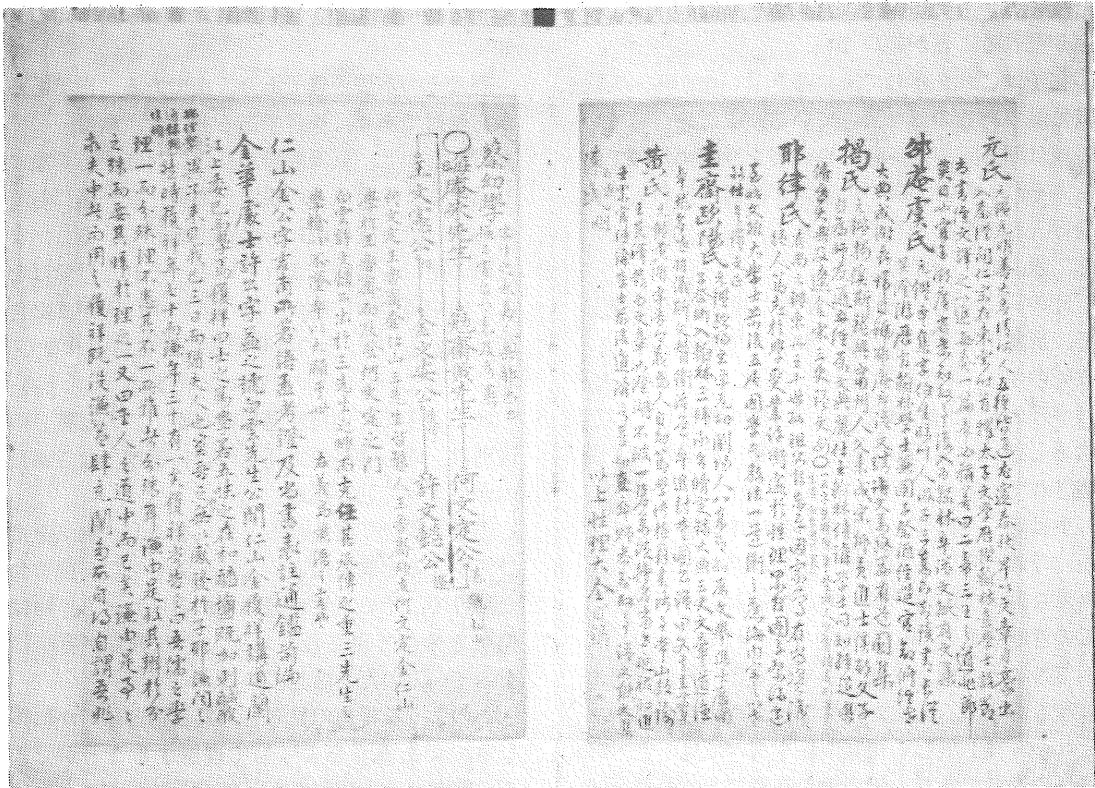
一般的に話されていることであるが、中国においては朱子がなくなった後、道学の正脈は絶えたのである。しかし退渓は中国以外において数百年の後に生まれ、朱子の道学をさらに承継することになられたので、退渓を指して朱子以後の第一人として認めることになり、また彼を先駆者と称することになったのである。

④それから退渓は韓国において社会的な積弊を匡正するのに寄与したことである。退渓は彼の弟子の一人である奇高峰に与えた書簡に次の言葉を書いている。「我が国においては正しい道を行くとか正しい主張を提示するならば困る立場に陥らされる。なぜかと言えば我が国は国土がせまくて人口が多いし、また人々はその性格が軽薄であるからである。軽薄らしくなるのは自ら行わなければならぬ当り前の道理を遂してゆかないからである」その理由はどこにあるのかといえば「学問にまだ優っていないものが、より高位の職責だけ狙いながら民の前に君臨する傲慢を現わすとか、また社会実情などに関して工夫もしていない立場のものが、独断論的な考えをもって経世奮勇を現わしているからである」と指摘している。

此の言葉は「きみ自身を知れ」と言ったソクラテスの教訓と相通するのである。

人間は誰でもひとりとしておられる時、雑念に陥りやすいし、また考えすぎの解放感に落ち入り、節制のない無礼なることを犯すことになるので「慎獨」するよう務めなければならない、また人間は感性的な衝撃により驕氣をもつことになるので、常に敬虔なる心持ちをしなければならないので「居敬」をだいじにするのだと、退渓は教えながら自ら実行したのである。

それだけではなく、退渓は今の慶北地方に所在



檀国大学 退溪記念中央図書館に保存されている李退溪の親筆  
(人物録整理原稿の一部)

する豊基郡守として務めていた時には元郡守であった周世鵬によって作られた白雲洞書院を朝廷に知らせそれを公式的に認められるように努力した結果、それが韓国最初の書院になったのである。中国の場合は宋時代の朱熹によって作られた白鹿洞書院が矯矢であると伝えられている。

白雲洞書院（王様より頂いた額子には昭修書院となっている）が建てられると、その頃から知名ある士類はほとんど故郷に書院を作り、そこから学問を研究しながら後進を養い始めたのである。より注目すべきことは、公職に務めていた高位職官吏達が公職より退くとさっそく故郷に帰って、学問研究と住民教化に務めてゆく社会的な雰囲気を振り起こしたのである。

この時から、士類は学問を通じて後學を養うことを以て人生の樂だと考え、清貧樂道を誇りながら不義の前では命を捨てるほど勇気を現わし、また国家のために命を尽くすという確固な信念を自らもつようになられたのである。

このような視点より見ると、退渓は従来の社会的な積弊を除くため寄与したところが多かったのである。

### 3. 自省録を通じてみた彼の自然観

退渓の自省録は退渓が彼の門下生に与えた書簡文を以て自己反省の教本として編輯したものなので、その内容が簡潔でありまた明瞭なので、それに基づいても退渓思想の真髄を知ることができる。

その中でも退渓の天命図説は、即ち彼の自然觀を集約させたのだと認められるので筆者なりの考えに基づいて述べてゆきたい。

第一に退渓は、天がなにかに対して闡明しておる。天は即ち理である(天即理)、その徳として元、亨、利、貞があるが、元は始源であり、亨は流通であり、利は成就を意味するし、貞は完成を言うのである。天理の動きを此の四つの徳を以て現わ

しているが、この四徳は常に休止しない、また秩序が乱れることが絶対ない。

孔子はこれを指して天之道と言いながら、天之道は誠であるのだと云っている。ここに言っている誠は即ち元、亨、利、貞の実を意味するのである。それからこの四つの要素が陰陽五行の気運を受け入れて形象として現われる。陰陽五行は金、木、水、火、土である。

此の両者の結合または分化の相互作用を通じて、形象世界の変転がなされるのである。即ち、五行の中で「木」は元理として「生」するし、「火」は亨理として「長」するし、「金」は利理として「収」するし、「水」は貞理として「藏」するのだと説明されている。

生は春、長は夏、収は秋、藏は冬を各々意味する。それから五行の中で「土」は四季節の旺気をみんな備えているので、常に位置しながら軸としての意味をもっているのだと解かれている。

このような視点に基づいて見ると、天地の間に理もあり氣もあると言うことを意味している。それから理と氣との相互関係を調べて見ると、理は氣の帥者であり、氣は理の卒者であるのだと話している。そういうわけで、帥と卒は分離できないことのように、理と氣とは常に分離できないのである。（理外無氣、氣外無理）

それだけではなく、四徳と五氣はその作用面において完全に分離され独立されているのではないということを退渓は明らかにしている。

即ち、元理内に亨、利、貞の理も含まれているし、また五氣の内には四徳の要素が、それから四徳の内にもまた五氣の要素が各々含まれているのだと云っている。

第二に退渓は人間と物を明確に区分しており、またそれらの各々異なる点を明らかにしている。人間と物の異なる点も理氣論を以て説明しているが、結論をまず話すと、人間は陰陽の正氣を帯びて生まれたし、物は陰陽の偏氣を帯びて生じたのだと云っている。

言い換えれば、此の世には理は一つであり、絶対二つではない。しかし氣は数えられぬ程多いし、また同じではない。

故に、その理が何かとして追求してゆけば、万物が一つとして通じる性をもっていることを知ることになる。それから、気が何かとして調べて見

ると、物は物なりに異なる氣をもっていることを知る。

理はその本質が無であり、虚である。虚であるから無対であり、無対であるわけで、理は一つである。しかし、氣は陰陽が互いに対立する形象より始まる。陰陽はその根源（太極）を一緒にしているわけで、陰の中にも陽が含まれているし、また陽の中にも陰が含まれている。それだけではなく、陰中陽の中に陰が、陽中陰の中に陽がまた含まれているので、その陰陽配合の変化は限りなく、相対できていないものがないのである。

此のような変化発展過程のなかで、人と物との区別は、即ち陰陽の気運をいかに帯びてなされたのかによって分かれる。

正気を受けて生まれると人になるし、偏氣を帯びて生じると物になる。人は正気を帯びて生まれたわけで、その気質が透明であるけれども、物は偏氣を帯びて生じたわけで、その気質が塞暗になっているのだと話している。

このような視角で見ると、人と物とはいかに異なるのであるかをより易く理解することができる。即ち、水火は氣をもっているけれども、生はもっていない（有氣無生）。冷たいとか熱いとかの気はあるけれども、生命はもっていないと言うことである。

草木は、生命はもっているけれども知覚はない（有生無知）。動物は主人を知っているとかのように、知覚力はもっているけれども正しいか正しくないかを区別する義はもっていない（有知無義）。

しかし、人間は全ての物がもっている要素をみんな備えている。即ち、人は氣、生、知、義をみんなもっている（有氣有生有知有義）。

従って、人は天に通じるとして、天人合一の論理が成立できるし、同時に人は小宇宙として存在する意味をもつのである。

そういうわけで、退渓は人の性を現わす時の性字を「性」と書くのに対し、動物の性を現わす時の書き方は横に「甡」、それから草木の性を現わす時には「甡」として逆に書いている。

その理由は、宇宙としての天地が天円地方（角）になっているからである。即ち、天は円として上にあり、地は角として下にあると言うことである。人間は小宇宙なので、まるい頭が上にあり角の肢体が下にあって大宇宙の如く上円下角である。し

かし動物は有知無義であり、小宇宙ではないので頭を横にしている。それから、草木はまるい頭(種)を下にして(土の中に埋められる)幹枝(角)を上にしている。即ち逆になっている。

このような全ての物を指して自然の現象であるのだと見る時、退渓は全ての物がもつ一つの理に基づいて、気が互いに異なる現象で現われていることを、より体系ある観察方法を以て自分の哲学的な論理を定立している。

#### 4. 生活倫理の根源はどこにあるだろうか

退溪の理気論に基づいて人間の生活秩序を考える時、天と人との区別は存在しないと言う論理を悟ることになる。

既に述べた通り、元、亨、利、貞が天道の四徳だと言えば、人間も自然の摂理内に含まれて存在するということは分明な事実である。

そうだったら、五行（金木水火土）に該当するものが人間において何であろうか。それは即ち、五常といわれている仁義礼智信なのである。

退溪は、孟子の四端論にひとつ追加させて五行中の土に当る具実之理として「信」（誠実之心）を話している。

四端とは、①具愛之理である「仁」（木：惻隱之心）と②具敬之理である「礼」（火：辞讓之心）と③具宜之理である「義」（金：羞惡之心）と④具別之理である「智」（水：是非之心）を意味するのである。

人間は元、亨、利、貞の四徳と仁義礼智信という五常に基づいて、生活秩序としての倫理的な根源を探している。

特に退渓は「居敬」と「慎独」を強調しているし、またそれを日常生活を通じて体行していたのは小宇宙としての人間、即ち天人合一の道を実現するためであった。

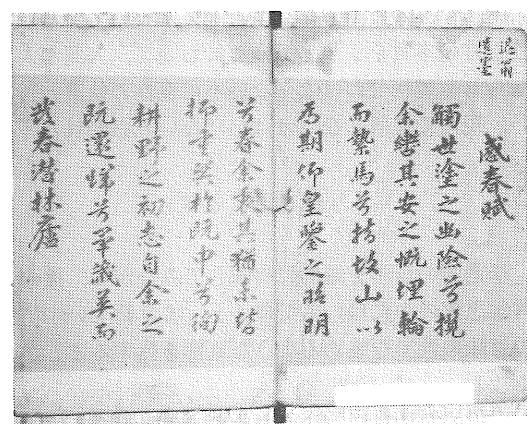
宇宙が玄妙なる摂理によってその運行が健在しているのだと言えば、人間は本心によつてその行動を健実にしなければならないという論理が、即ち人間小宇宙論であり、天人合一の説である。

このような観点から見れば、倫理とは昔の本である「説文」の解義の通り、異質個体であるいろいろな人達が秩序ある調和の美を具現するため、守らなければならない線としての道を行けるか、行

かれないいかに従って、人間は、①上智、②中人、③下愚の三種に區別されると退渓は話している。

人には生まれる時、天と地より与えられた氣と質がある。氣には清と濁の區別があり、質には粹と駁の區別がある。

生まれる時、清氣（清い気）と粹質（まじりけのない質）を帯びているならば、上智人になるばかりでなく、智慧が明るく行動が誠実で天と共に合一される。



檀国大学 退溪記念中央図書館に保存されている李退溪の親筆  
(春の感じを詩歌の形で書いたのである)

中人と言うのは、気は清いけれども質が駄（まるじる）だとか、また質は粹質となっているけれども気が濁（にごりけがれた）になっているものである。中人は知的な余裕は有りうるけれども、行動がその知的な水準に及ばないとか、反対に行動は悪くはないけれども知的な面が不足なので、天人合一の可能性が有るかないかがはっきりしていない。

それから、下愚は濁気と駭質を帶びて生まれたものである。知的にも明晰でない。行動方式も誠でないわけで、常に真理とは合一できない人間型を指すのである。

たとえ、人間は上智、中人、下愚などの三種に区分されるけれども、これは必ず先天的なものでないわけで自分なりの努力如何によっては、足らないところを補填させてゆくこともできるのだと銀澤は教えている。

言い換えれば、教育を通じて改善してゆくこともできるし、また務実力行すれば自ら自分なりの

品格をより高めてゆくことができるのである。

たとえ上智としても、自身の気清質粹を過信し驕慢になれば、上智のものも下愚になりやすい。しかし、下愚としても自分なりの真誠を尽くし知行合一に務めると、下愚の立場より抜け出すことができる。

人間生活に伴う倫理とは、常に人間として知覚して体得すべきその体質をより正しく理解し、また理解しているところを誠実に行ってゆけば倫理は加一層すばらしく暢達されるのである。

そう言うわけで、倫理は天理に基づいている四徳五常の本質を実現してゆくにおいて、人間が人間らしく遵行せねばならない不可変性の軌道と言ひ、視角で理解しなければいけないと思われる。

## 5. 結びのことば

李退渓の哲学を端的に吟味してみながら、彼の哲学思想の中にはいってゆくと、より新しい宇宙の意味の世界を眺めるような気持を感じることができる。

可視的な世界に、このように或る形象を直感することはできないけれども、論理の無限的な展開

過程においての理氣論の世界をより体系ある見方で理解することができる。

限りのない展開の余地をもっているのが、理の世界であるといえば、それをより合理的に象形化させる方法をもって論証することができるのが易学である。

天地の間において、唯一の極点は太極である。太極が両儀として、陰と陽に分化され、それがさらに老陽、少陰、少陽、老陰という四象に分化される。四象はまた八卦になり、八卦は進んで六爻の形で六四卦になる。此の分化過程が、即ち宇宙秩序の整然性であり無違性であるばかりではなく、それを実証する永遠な論理でもある。

人間生活において、そんな論理が否定されるはずは絶対ない。それ故に、我らの生活倫理は常に明瞭な秩序としての線になっていなければならないのである。

特に、速度文化の高度化現象が、我らの文化的な原点を昏迷させているし、また伝統的な立地点を動かしている恐れがある現代社会において、倫理生活の本質的な軌道が何かに対して、一般的な認識を新たかにするのは非常に意味あることだと思われる。

